

私の出会ったフランス知識人たち

伊藤達也

九〇年代にフランスに留学していた頃、日本で神格化されている人物がパリでは普通に生活していることが不思議であった。何かのシンポジウムで、空いている椅子をさがしていると、ほらここに座りなさい、とばかりに一脚の椅子を押し出した女性がいた。指に大振りの指輪が光るこの人は、大学のエレベーターなどで時々乗り合わせ、扉を押さえてくれたり、行き先階の番号を押ししてくれたりする人物でもあった。常に週刊に演出されたブルジョワ的振る舞い。上品な服装やアクセサリーでフランス人女性を作り上げようとしているかに見えるこの人物の顔は、目立って色が浅黒く丸い。小さな目を大きく見開き、公称ではユダヤ系ということだが、むしろキルギスやモンゴル系に見える。(あるいは彼女の祖国ブルガリアでは、ユダヤ系がスラブ系やトルコ系と複雑に混血しているのだろうか?) 髪は見事な金色に染められ、フランス人以上に明晰なフランス語を話す。この人物、つまりジュリア・クリステヴァは東欧の故国からフランスに留学後、ロラン・バルトの指導で博士論文を提出し、精神分析、記号論、フェミニズムなどの分野で膨大な本を書き、世界中で講演しながら、多くの外国人学生を指導していた。

私がフランスにきた理由はしかし、このクリステヴァも属するパリ第七大学創設メンバーの一人でもあり、言語学部の初代学部長でもあったアントワーン・キュリオリの言語学を学ぶためだった。クリステヴァとは正反對の意味で、キュリオリもまた神格化されていた。彼は六〇年代に独創的な言語学を企て、一九九二年の定年間際まで一冊の書物も公にせず、全て口伝で膨大な数の博士論文を指導しながら、自らの理論を精密化し

ていった。一九九〇年に最初の論文集 *Pour une linguistique de l'pronciation* (未訳) が出版され、私は渡仏前にその本を東京・新宿のフランス図書で買っていた(内容は全く理解できなかった)。その論文集が出版される前は、フランスでも過去の学生によるゼミの記録が質の悪いコピーで回し読みされているだけだった。

私が留学した時は彼が定年を迎えた直後で、大学ではもう教えておらず、古巣の高等師範学校エコールノルマルでの六〇年代から続く通称「火曜日のゼミ」だけが彼の教えに直接触れられる場であった。カルチエ・ラタンの奥深く、ユルム通りにある学舎。火曜日の夕方六時半きっかりに、キュリオリはどこからともなく現れ、常連の聴衆と微笑みながら短い会話を交わし、用意してきた原稿を見ながら講義を始めるのだった。前の週の続きであることもあるし、急に新しいテーマが始まることもあった。その時々で彼を捉えているアイデアを様々な言語の様々な語彙で検証するというのが彼のスタイルだった。ノルウェー語の隠語や、フランス語では言わないがコルシカではこういう使い方があって、と自らの出自であるコルシカの、それこそ農民の言葉の中に、数千年にわたるインド・ヨーロッパ語の古層を見いだす。言語活動の変わらぬ特徴を見いだそうとする気の遠くなるような試行錯誤。ゼミの思い出は数知れない。ある日突然「得」という漢字を黒板に書き、これで正確ですか、と私に聞いてきた。キュリオリは黒田重幸や久野暁サトキの英語の著作を通じて日本語の勉強もしていた。「正確です、obtemperare という意味ですね」「そう、obtemperare」と言うと、頭の中でアイデアが乱反射したのか、手に持っていた眼鏡のツルの

先端を口先に軽く持つていきながら（それは彼の癖だった）しばし沈黙に浸った。

パリは五区を中心として街全体が大学であるかのような感じだった。教室は街中に分散し、グランゼコールや博士課程だけの研究院など様々な教育機関があった。当時、デリダのゼミはパリの知的名所の一つになっていた。彼のゼミは週に一度、夕方遅い時間に、ラスパイユ大通りにあったEHESS（社会科学高等学術院）の一番大きな階段教室で開催されており、月四回のうち三回は「開かれた」、誰もが聴講可能なゼミで、一回は指導学生だけの「閉じられた」ゼミであった。生涯フランスの大学ポストと無縁であったデリダは、黒いシャツに真っ赤なバラの刺繍の施された黒いネクタイを締めて現れると、準備をしてきた原稿を読みあげる形式で講義をした。彼の話すフランス語には独特の癖があり、早口でかなり聞き取りにくいものだった。黒板にはドイツ語でしか板書しなかった。デリダは初回の講義の冒頭で、皆さんの署名が欲しい、と言い、聴衆は彼の「署名」に関する本を思い出し、軽いざわめきが起こったのだが、何の事はない、もっと大きな教室を確保してもらうため、学校側と交渉するという実的な理由からだ。

振り返ればその時代、パリが世界的知的中心であるという幻想、常に自分たちは例外だと主張できると信じられる時代が終わろうとしていた。アラン・ソーカルによる『知的欺瞞』が出版され、二年後に仏訳された。しかし大半のフランスの知識人たちは我関せずという態度だった。若干の影響が現れたのは九〇年代の終わり頃だっただろうか？「こう言うソーカルに批判されてしまうのだから」という言葉をキュリオリのゼミで聞いたことがあった。しかし彼らは結局、自らのスタイルを最後まで変えなかったのだが……。

縁あって日本で職を得てからも、アリアンス・フランセーズ等で開催される、フランス政府によるフランス文化紹介のイベントには時間の許す限り足を運んでいた。

著名なフランスの作家ジャン・フィリップ・トウーサン氏が来日したのは、ちょうどジダンが二〇〇六年のワールドカップの決勝戦で頭突き

をして退場になった事件を題材に *La Mélanche de Zidane*（「ジダンの憂鬱」）という薄本を出版した直後だった。この時、講演後の食事会になぜか呼んでもらったのだが、初めて会う本人はかなり大柄で、身体的特徴はまさにベルギー人だった。食事中、味がベルギーのビールに似ているのだろうか、彼は、サポロ、サポロ、とサポロのビールばかり注文した。あなたはなぜブリュッセルに居続けて、パリに住まないのですか？と聞くと、私の街だから、と答えた。勤務先の大学が提携しているブリュッセルの大学の名を挙げると、そこでは友人が教えている、良い学校だ、ブリュッセルに来るときは是非連絡をと、名刺をくれた。

その後「フランス語圏文学」ということが言われ出し、フランス語を使うフランス以外の国の出身者も来日するようになった。そして同じ頃、前任者が転勤し、通訳の後任が私に回ってきたのだ。

二〇一四年春、邦訳が出たばかりのギニア人ルノドー賞作家、ティエルノ・モネンボ氏が来日したのもフランス語圏作家としてであった。前任者と違い、私は文学専門ではないので、平野啓一郎氏を彼との対談の相手に依頼した。モネンボ氏はアフリカの遊牧民ブル族の出身で、フランスで生物学の博士号を取得後、ノルマンディー地方で長らく教師をしていた。化学のノートに最初の小説らしきものを書き始め、今日では世界的に重要なフランス語圏作家となっている。長年住んだフランスのノルマンディー地方を離れて、最近故国のギニアに戻った理由を尋ねられると、「ギニアでは埋葬費用が無料だから」と言って笑わせた。しかし彼は、平野氏の「あなたの作品はギニアでどう受け入れられているのですか？」という質問には即答できずにいた。現時点で彼の小説の読者はほとんどがヨーロッパ人だろう。日本料理店での遅い夕食後、出口で靴紐を結んだままの革靴を履く横着な日本人と、日本の習慣に順応し同様の振る舞いをするフランス人を尻目に、モネンボ氏は玄関先にしつかりと腰を下ろし、靴紐を丁寧にほどき、一足ずつ足を入れてから再び結ぶという習慣をただ一人悠然と実行した。誰もが思ったはずだ。このアフリカ人作家はその場にいる誰よりも西洋人だ、と。

最後に、最新の出来事について少し話をしたい。

昨年四月、フランス大使館から秋に来日する作家のリストが届けられた時、同僚のフランス人達はある名前を見つけて興奮していた。「ピエール・ルメートル氏が来日するなら、是非大学に呼びたい」彼らは口々にそう言った。私は推理小説を読まないで、どのような人物か全く見当がつかなかったが、資料には二〇一三年にゴンクール賞を受賞し、ミステリと純文学の両分野で活躍している作家とあった。そこで中村文則氏が頭に浮かび、早速対談の相手にと打診をしたところ、「ルメートルさんに会いませんかって言われたら断れないでしょう」という返事が寄せられ、改めて自分の読書の偏りを痛感させられたのだ。

秋の講演会当日、現れたルメートル氏は周囲への気配りの細やかな、遅咲きの苦勞人であった。古今東西の文学に精通し、脚本家や文学講師の

長い経験から、現代の読者には時間がないことを知り抜いている。彼の

小説は最初の一行を読むと、最後まで頁を繰る手を止められないと言われているが、通訳の準備のために読んだ作品では、読者をゲームやネットから奪い返す、あらゆる手法が駆使されていた。彼は子供の頃にデュマの『巖窟王』を読んだ時の興奮を、現代の読者に提供したいのだ。

ルメートル氏は来日の折、新作を校正中であった。夕食時にワインの酔いがまわった頃を見計らって、私が発売前の新作の内容を尋ねると、「子供による幼児殺人の話だよ」とそっと耳打ちしてくれた。『Hois jours et une vie』『三日とひとつの命』と題された彼の最新作は、ちょうどこの号が出る頃にフランスの書店に並んでいるはずである。

(いとう たつや)



左からルメートル氏、筆者、中村氏
控室では中村氏に対し、次の仏訳はガリマール書店から出すようにしなさい、と強く勧めていた。